

理解を求め、かの世での人間の完成を希求するこの書物にこそ、修道院神学者アンセルムスの真価が遺憾なく発揮されていることは、言うまでもない<sup>40)</sup>。

---

## エロイーズ書翰に見る中世修辞学としての書翰作文術

永嶋 哲也

### 0. はじめに

「中世の自由学芸」というテーマのシンポジウムにおいて、本提題者に与えられた課題は「12世紀の自由学芸」であった。さらに言えば、アベラール周辺を取り上げて、12世紀前半における自由学芸の受容状況を論じることであった。その課題に対して、本稿での議論を先取りして言えば、エロイーズとアベラールの往復書翰においてどのように修辞学的伝統が使われているかということを見つめることで、その責を果たしたいと思う。というのも、後に論じる通り、自由学芸が当時どのように受け取られていたかということに関して、修辞学の受容というのは非常に示唆的な位置を占めると思われるからである。

実際のところ、大学の黎明期であるこの時代の自由学芸において言及されるのはもっぱら論理学であり、ときおり文法学である。修辞学やいわゆる四科が言及されることは少ない。事実、西欧中世において修辞学は、われわれの知るような修辞学の伝統、つまりアリストテレスからキケロー、クインティリアヌスへの修辞学体系という仕方では実践されていなかったとしばしば指摘される。もちろんキケロー、クインティリアヌスについてはマルティアヌス・カペラの紹介によって広く知られていたが、政治演説あるいは法廷演説に重き置かれた彼らの修辞学は、崇拝されてはいても、

---

39) *P. c.* XXVI, 121, 14-18.

40) 本稿に関して詳しくは、cf. 矢内義顕「カンタベリーのアンセルムスと *Artes liberales*」、『文化論集』第45号(2014), pp.1-22.

あまり実践はされていなかったという意味である<sup>1)</sup>。中世における修辞学の一つの実践は、一つは教会における説教の術だったと言えよう。しかし、この説教における修辞学の実践については本稿でふれる余裕はない。修辞学の主たる実践としてここで取り上げたいのは書翰の作文、つまり中世独自の修辞学である「書翰作文術 *Ars Dictaminis*」である。

しかしその話題に進む前に、アベラールと自由学芸の関係を概観しておきたい。

### 1. アベラールと自由学芸 四科

アベラールはいわゆる四科、つまり算術学、幾何学、天文学、音楽を学んだのだろうか。結論から言えば、それはわからない。しかし、真偽のほどはともかく非常に興味深い報告がある。ミューズ氏の報告によれば<sup>2)</sup>、12世紀に書かれた写本<sup>3)</sup>に書き込まれている逸話に、アベラールがシャルトルのティエリから「数学 *quaedam mathematicae lectiones*」「四科 *quadriuium*」を学んだが、思いのほか難解で修得できなかった、とある。確かに『災厄の記』<sup>4)</sup>にはソアッソン教会会議においてティエリとおぼしき人物から擁護発言があったとは書かれている<sup>5)</sup>。つまりアベラールはティエリと面識や交流のあった可能性があるわけだが、だからと言って先の逸話を裏付ける材料となるわけではない。それどころかその逸話にはアベラールに関する明らかな事実誤認も含まれ<sup>6)</sup>、歴史的な資料としては今ひとつの信用性しかない。それゆえ、興味深い内容であるが真とも偽とも判定することはできない。

四科の中でも数学はさておき、音楽についてはどうであろうか。エロイ

1) 例えば、チャールズ・H・ハスキンス『十二世紀ルネサンス』みすず書房、1997年、111-13頁。

2) Constant J. Mews, 'In search of a name and its significance: A twelfth-century anecdote about Thierry and Peter Abaelard', *Traditio*, Vol. 44, Fordham University, 1988, pp. 171-200.

3) Germany, Munich, Bayerische Staatsbibliothek, Clm 14160.

4) *Historia Calamitatum*, ed. J. Monfrin, Librairie Philosophique J. Vrin 1959. *The Letter Collection of Peter Abelard and Heloise*, ed. David Luscombe, tr. Betty Radice & David Luscombe, Oxford Medieval Texts 2013. 『アベラールとエロイーズ—愛と修道の手紙—』畠中尚志・訳、岩波文庫、1939年1964年改訳。『アベラールとエロイーズ 愛の往復書簡』沓掛良彦・横山安由美・訳、岩波書店、2009年。

5) Monfrin l. 878; Luscombe Ep. I § 43; 畠中訳 44頁；沓掛訳 54頁。

6) イングランド生まれ (*natione anglicus*) と記されている。

ーズ書翰で語られていることから、アベラールが愛の歌を作詞・作曲することに長けていた<sup>7)</sup>ということはよく知られている。『カルミナ・ブラーナ』に含まれるいくつかの作品（‘Dum Diane vitrea’ CB 62<sup>8)</sup>、‘Virent prata hiemata’ CB 151<sup>9)</sup>、‘Hebet sidus leti visus’ CB 169<sup>10)</sup>など）はアベラルの手によるものではないかと推測されている<sup>11)</sup>ものの真偽のほどはわからない。残念ながらアベラールに確固として帰される恋愛詩歌は現存していない。確固として彼の作品と見なされている歌は賛美歌（‘O Quanta Qualia’ など）や哀歌（“Planctus” など）の宗教歌だけである。しかしいずれにせよ、仮にアベラルの作詞作曲能力に関してエロイズの言っていることが真実だったとしても、彼が「四科」の一つとしての音楽 *musica* を学んだという証左にはならない。当時、学問としての音楽と音楽の実践との関係がどのようになっていたのかは興味深い問題ではあるが、本稿においてこれ以上深入りすることはできない。

## 2. アベラールと自由学芸 三科

それでは、四科ではなくて三科の論理学以外はどうであろうか。まず文法学であるが、先に紹介した「逸話」にも文法学と神学を修めた旨が書かれている<sup>12)</sup>し、それ以前に、アベラール自身が『文法学』という著作を書いたと神学書 *Theologia Christiana* のなかで証言している<sup>13)</sup>。しかしこの著作は現存しておらず、本当に書かれたか疑う研究者さえいる<sup>14)</sup>。書かれたが失われたにせよ、そもそも書かれなかったにせよ、アベラールは論理

7) Monfrin p. 115; Luscombe Ep. II § 13; 畠中訳 82 頁; 横山訳 112 頁。

8) *Love Lyrics from the Carmina Burana*, ed. Patrick Gerard Walsh, UNC Press Books, 1993, pp. 15-19. 『カルミナ・ブラーナ ベネディクトボイエレン歌集全訳』永野藤夫・訳、筑摩書房、1990 年、91-92 頁。『放浪学僧の歌 中世ラテン俗謡集』瀬谷幸男・訳、南雲堂フェニックス、2009 年、101-05 頁。

9) *Love Lyrics...*, pp. 172-74. 『カルミナ・ブラーナ』215-56 頁。

10) *Love Lyrics...*, pp. 192-94. 『カルミナ・ブラーナ』234-35 頁。『放浪学僧の歌』139-41 頁。

11) *Love Lyrics...*, pp. 174, 192-93. 『放浪学僧の歌』313-14 頁。

12) Mews, ‘In search of a name...’ p. 172.

13) *Theologia Christiana*, IV 155, *Petri Abaelardi opera theologica* II, ed. E. M. Buytaert, (Corpus Christianorum Continuatio Mediaevalis 12), 1969, p. 343.

14) Geyer は『「カテゴリー論」註解 *Glossae super Categoriae*』のことじゃないだろうかと疑っている。Beiträge zur Geschichte der Philosophie des Mittelalters Bd. 21 Heft 4, 1933. pp. 618-19. Constant J. Mews, ‘On Dating the Works of Peter Abelard,’ in *Archives d’histoire doctrinale et littéraire du moyen âge*, 52 (1985), p. 93.

学の議論に文法学の用語を積極的に導入しており、文法学への造詣はそれほど疑う必要もないだろう。ただそれを詳述することは、多くを論理的な話題に費やすことになるであろうから、ここではこれ以上深入りするのを避けよう。

次に修辞学の修得、実践について確認しよう。まず指摘できるのが、アベラル自身『災厄の記』のなかで修辞学を学ぶ目的でシャンポーのグイレルムスの講義を聞いたと記している<sup>15)</sup>ことである。しかし彼がその記述の直後に述べているのはグイレルムスとの普遍に関する対立であり、修辞学上の話題はでてきていない<sup>16)</sup>。グイレルムスと衝突から10年ほど後に書かれた<sup>17)</sup>『ポルフィリウス「イサゴゲー」註解 *Glossae super Porphyrium*』では、一カ所、キケローの修辞学（『発想論 *De inventione*』）へ、ボエティウス『キケロー「トピカ論」註解 *Super Topica Ciceronis*』からの引用という仕方而言及している<sup>18)</sup>。アベラルは『イサゴゲー』や『カテゴリー論』『命題論』を注解した後にボエティウスの『トピカ論 *De topicis differentiis*』を註解している。論理的なトポスと修辞学的なトポスとの両方を扱うこの著作の註解<sup>19)</sup>のなかで4回、修辞学について著作するつもりであることが述べられている<sup>20)</sup>。もしかすると *De topicis differentiis* を註解するに際してキケローの『発想論』を集中的に読みなおしたのかもしれない。部分的にしか現存していないこの註解書のなかで実に16カ所で『発想論』を、さらには『ヘレンニウスに与える

15) Monfrin l. 81; Luscombe Ep. I § 6; 畠中訳15頁; 沓掛訳11頁。

16) 普遍を修辞学の文脈で議論することは当時では不自然ではなかったという指摘もある。Karin Margareta Fredborg, 'Abelard on Rhetoric', in *Rhetoric and Renewal in the Latin West 1100-1540: Essays in Honour of John O. Ward (Disputatio)*, ed. Constant J. Mews, Cary J. Nederman, Rodney M. Thomson, John O. Ward, Brepols Pub., 2003, pp. 55-80.

17) グイレルムスのもとで修辞学を学んでいたのは1108-09年ころ *Glossae super Isagoge* が書かれたのは1120年ころであろうと推定されている。Cf. Mews, 'On Dating...', pp. 73-134.

18) Petrus Abaelardus, *Logica 'Ingredientibus'* 1, hrsg. Bernhard Geyer, *Beiträge zur Geschichte der Philosophie des Mittelalters* Bd. 21 Heft1, 1919, p. 9 ll. 1-5.

19) *Glossae super Topica*, in Pietro Abelaedo *Scritti di Logica*, ed. Mario Dal Pra, Firenze 1954, pp. 205-330. Abelard, *Super topica glossae*, Fredborg, 'Abelard on Rhetoric', pp. 61-80.

20) 明白に "Rethorica" という仕方而言及されているのは Dal Pra p. 263 ll. 24-25 / Fredborg §2 と Dal Pra p. 267 ll. 15-16 / Fredborg §3. 3 との2カ所。暗に言及されているのも Dal Pra p. 242 ll. 28-29: "in tractu argumenti disputabimus" と Dal Pra p. 257 l. 9 / Fredborg §1. 1: "hoc loco prelibare nos convenit" との2カ所。

修辞学書 *Rhetorica ad Herennium*』も一度、引用している。しかしその後ほどなくして書かれたであろう『理解についての論考 *Tractatus de intellectibus*』や別の「イサゴーゲー」註解 *Glossulae super Porphyrium* に『発想論』の引用は見られない。さらに後の時期に書かれた *Theologia christiana* や *Theologia 'Scholarium'* といった神学書においてはまた引用がなされている<sup>21)</sup>が、しかしもっとも遅い時期に書かれたであろう倫理学書 *Dialogus inter philosophum, Judaeum, et Christianum (Collationes)* や *Scito Te Ipsum (Ethica)* では『発想論』の引用は見つからない。

このような使用度の違いはもちろん一つには書かれている内容、取り上げられている事柄の違いからきているだろうと推察できる。しかしただそれだけではなからう。つまり時期による違い、言ってみればどれくらい修辞学の権威を用いようと思った時期なのかという違いからもきていると思われる。というのも引用が必ずしも内容的に必要とされて使われたとは思えない仕方では使われているからである。一例を *Theologia 'Scholarium'* から挙げてみよう。

哲学者たちは一なる神のみ知っていた。その一人であるキケローは『修辞学』第1巻で、次のような引用をしている「哲学を愛好する者は神々が存在しないと考えている」<sup>22)</sup>と。つまり、むしろ神は一であって、神々と複数ではないということだろう<sup>23)</sup>。

つまり神の三一性について認識可能性を神学的に論じる文脈で、そのアウクトリタスとしてキケローの名前と『修辞学書』という書名を用いている。しかしそこで用いられる文は『発想論』において論証 *argumentatio* に必然的論証と説得的論証があると説明する文脈で用いられた単なる例文である。修辞学的な議論を援用しなかったのではなく、ここでアベラールが欲した権威はキケローの名前と『修辞学』の書名だけである。

もちろんさらに網羅的にかつ詳細な検討が必要であることは言うまでも

21) *Theologia christiana* でのキケロー『発想論』の引用が7箇所、「ヘレンニウスに与える修辞学書」が1箇所、*Theologia 'Scholarium'* では『発想論』が6箇所である

22) Cicero, *De inventione*, I, XXIX, 46; 『発想論』(『キケロー選集 6』) 岩波書店, 2000年, 38頁。

23) *Theologia 'Scholarium'* I 97, *Petri Abaelardi opera theologica* III, ed. E. M. Buytaert et C. J. Mews, (*Corpus Christianorum Continuatio Mediaevalis* 13), 1987, pp. 356-7.

ないが、当時、アベラールがキケローや修辞学というものに尊敬というべき感情を有していた（アウクトリタスとしてわざわざ用いるに値する権威だと見なしていた）こと、そして彼の読者たる同時代人たちにも同様な受け取られ方が期待できたということを、この事例から読み取るのは決して不自然ではないだろう。

### 3. Ars dictaminis 概観

ピーター・ドロンケがエロイズとアベラールの往復書簡について「教養に裏打ちされた高度に文学的な文書だとみなすのは妥当である」と述べている<sup>24)</sup>。ドロンケだけでなく、今日、多くの研究者が同意する立場であろう。筆者自身、エロイズ書簡の一節をとりあげ、激情にまかせて書かれたようなものではなく、実に多くの修辞が凝らされた文章であることを別所で論じた<sup>25)</sup>。さらに言えば、エロイズ書簡は当時の修辞的技巧である Ars Dictaminis が用いられていることも指摘されている。次に、中世の修辞学ともいわれる Ars Dictaminis をマーフィの概説<sup>26)</sup> に即して概観したい。さらにそこで確認したことを踏まえて、エロイズ書簡さらにはアベラール書簡の修辞的技法について考察したい。

本稿冒頭でも述べたように、修辞学は概ね不人気で、その実践は古代とは異なっていたと言われている。なぜそうってしまったか、原因の主たるものは社会形態の変化であろう。つまり演説に長けた人材を必要とする古代ローマの政治・司法制度のなかで求められる修辞学というのは演説を主たる対象とするものになる。文章は口頭が中心であるような文化のなかで文書（所記）は単なる記憶の補助にすぎなかった。しかし古代ローマの政治・司法制度が崩壊した後は、「演説」修辞学の必要性が低下するのは避けられない。逆に封建体制が成熟してゆくなかで言わば管理業務のようなものは増えていく。つまり文書作成である。特に封建社会という身分制度の中で人間関係が複雑化し、なかでも書翰作成は難化してゆく。そういう状況のなかで西欧ラテン世界の書翰文化を支えていたのはいわゆる

24) Peter Dronke, *Women Writers of the Middle Ages*, Cambridge Univ. P., 1984, pp. 107-08.

25) 「エロイズ書簡における amor と amicitia」京大中世哲学研究会 第 220 回研究会、於・京都大学吉田泉殿、2011 年 11 月 26 日。

26) James J. Murphy, *Rhetoric in the Middle Ages: A History of Rhetorical Theory from Saint Augustine to the Renaissance*, University of California Press, 1981.

“*formulae*” と呼ばれる手紙の文例集だった。中世初期（7～8 世紀）において発達し、状況が異なれば文例も異なる必要があるため、ほどなく 100 例以上の例文を載せた文例集も登場する<sup>27)</sup>。

やがて個々の状況を捨象して書翰作文の技術 *ars* が論じられるようになる。そのような指南書で現存している最初期のものは、モンテ・カッシーノのベネディクト会修道士アルベリクスによって 1080 年代に書かれた書物 *Dictaminum radii (Flores rhetorici)* と *Breviarium de dictamine* である<sup>28)</sup>。モンテ・カッシーノから出発した書翰作文術は、ボローニャに場所をかえて発展し、やがてアルプスを越えてフランス（特にオルレアン）に、次にドイツやイギリスにも到達することになる。そしてキケロー流の修辞学理論も取り入れ理論的に洗練されたものとなり、13 世紀に理論的完成を見た書翰作文術は、およそ 16 世紀まで熱心に関連の著作が編まれた。

アベラルールの『災厄の記』は 1132-33 年頃、それに続く往復書翰は 1132-37 年頃に書かれたと推定されている。エロイーズ書翰前でアルベリクス後の *Ars dictaminis* 著作としてマーフィが挙げているのは、1111-18 年に成立したと推定される Adalbertus Samaritanus, *Praecepta dictaminum*, 1119-24 年の Hugh of Bologna, *Rationes dictandi prosaice*, 1119 年の Henricus Francigena, *Aurea gemma* で、これらはいずれもボローニャで著作されている<sup>29)</sup>。エロイーズがどの時期にどこでどのような教育を受けたのかは明らかでないが、後に見るように彼女が *Ars dictaminis* を使いこなしているのは、イタリアで誕生してあまり経ってない学芸<sup>30)</sup>を北フランスに住むエロイーズがすでに身につけていたということの意味する。

同じくボローニャ近辺で 1135 年ころに成立した著者不明の *Rationes dictandi*<sup>31)</sup> を例に *Ars dictaminis* の学説と特徴を見てみよう。構成としては、序節のあと文書 *dictamen* と書翰 *epistola* を定義し（2, 3 節）、書翰の五部分：冒頭挨拶 *salutatio*、導入 *benevolentiae captatio*、叙述 *narratio*、

27) Murphy, *Rhetoric in the Middle Ages*, p. 200.

28) Murphy, *Rhetoric in the Middle Ages*, pp. 202-11.

29) Murphy, *Rhetoric in the Middle Ages*, pp. 211-20.

30) ドロンケは特に Adalbertus Samaritanus からの影響を指摘している。Cf. Dronke, *Women Writers...*, p. 111.

31) *Rationes dictandi*, ed. L. Rockinger, *Briefsteller und Formelbücher des elften bis vierzehnten Jahrhunderts*, I, New York 1961, pp. 9-28. Anonymous of Bologna, *The Principles of Letter-Writing (Rationes dictandi)*, tr. James J. Murphy, in *Three Medieval Rhetorical Arts*, University of California Press, 1985.

懇願 *petitio*, 結語 *conclusio* を論じた (4-9 節) あと、書翰の簡略化や構成等の細論を述べて (10-13 節) いる。これらの中でもっとも多くの紙面が割かれるのが第5節の冒頭挨拶 *salutatio*, つまり書き出しの挨拶・呼びかけである。ここだけで実に3分の1の分量となっている。そこでは、冒頭挨拶とは何か、冒頭挨拶には何が書かれているべきか、さらに実例を挙げて (為政者から教皇への、臣民から高位聖職者への挨拶、教皇の一般的挨拶、皇帝から万民への挨拶、教会関係者間での挨拶……など) 説明がなされ、最後に冒頭挨拶についての考察が述べられている<sup>32)</sup>。そもそもモンテ・カッシーノのアルベリクスの *Dictaminum radii* においては、序文 *proemium* と冒頭挨拶 *salutatio* の説明が別だてになっで行われている<sup>33)</sup> が、この冒頭挨拶を重視することが書翰作文の修辞学である *Ars dictaminis* の大きな特徴の一つであると言えよう。

#### 4. Heloise 書翰と *Ars dictaminis*

##### 4.1 冒頭挨拶 *salutatio*

エロイズが第4書簡で、第3書翰の冒頭挨拶にたいそう立腹シアベラールを批判していることはよく知られているが、*Ars dictaminis* の冒頭挨拶重視を念頭に置くと、エロイズ立腹の理由が理解できる。まずエロイズの冒頭挨拶をラテン語原文と邦訳 (畠中訳) で見てみよう。

##### 第2書簡冒頭

“Domino suo, immo patri; conjugii suo, immo fratri; ancilla sua, immo filia; ipsius uxor, immo soror, Abaelardo Heloysa”.

「彼女の主いなむしろ父、彼女の夫いなむしろ兄弟であるアベラールへ——彼女の婢いなむしろ娘、彼女の妻いなむしろ姉妹であるエロイズより」<sup>34)</sup>

##### 第4書簡冒頭

“Unico suo post Christum unica sua in Christo”

「キリストに次ぐ彼女の唯一の者へ——キリストにおける彼の唯一の女より」<sup>35)</sup>

32) *Rationes dictandi*, pp. 10-18; *The Principles of...*, 1985, pp. 7-16.

33) Cf. Murphy, *Rhetoric in the Middle Ages*, p. 205.

34) Monfrin p. 111; Monfrin p. 122; 畠中訳 73 頁 (横山訳 99 頁)。

35) Luscombe p. 158; Monfrin p. 117; 畠中訳 99 頁 (横山訳 137 頁)。



## 第 6 書簡冒頭

“Suo specialiter sua singulariter”.<sup>36)</sup>

「種的には彼女のものである人へ——個的には彼のものである者より」<sup>37)</sup>

原文を眺めれば入念に練り上げられた冒頭挨拶だということが見て取れよう。すでに慣習的となった形式化された挨拶儀礼があったのだと推測される。次にアベラールの表現も確認したい。

## 第 3 書簡冒頭

“Heloyse dilectissime sorori sue in Christo Abaelardus frater eius in ipso”

「キリストにおける彼の最愛の姉妹エロイーズへ——キリストにおける彼女の兄弟アベラールより」<sup>38)</sup>

## 第 5 書簡冒頭

“Sponse Christi servus eiusdem”.

「キリストの花嫁へ——キリストの僕より」<sup>39)</sup>

Ars dictaminis の利用という点ではしばしばエロイーズの名前が挙げられるが、アベラールも従っていると見なすのが妥当だろう。

また先にもふれた第 3 書翰の冒頭挨拶で、エロイーズの名前がアベラールの名前より先に書かれているということについて、エロイーズは「書翰の慣習に反して *preter consuetudinem epistolarum*」<sup>40)</sup> いると言って批判している。だが実際、Ars dictaminis においてこのような場合には送り手側の男性を前に、受取手の女性を後に書くことになっているのだろうか。

36) Luscombe p. 218.

37) この冒頭挨拶に関しては畠中訳 (143 頁) ではなく拙訳を用いた。畠中訳の依拠したテキストがおそらく “Suo specialiter” ではなく “Domino specialiter” となっていたため、モンフラン版のテキストとは対応しないからである。またここはジルソンが論点にしたことでも有名な箇所である。Cf. Étienne Gilson, *Héloïse et Abélard*, J. Vrin, 1938. エチエンヌ・ジルソン『アベラールとエロイーズ』中村弓子・訳、みすず書房、1987 年。

38) Luscombe p. 142; 畠中訳 88 頁 (杏掛訳 121 頁)。

39) Luscombe p. 218; 畠中訳 114 頁 (杏掛訳 161 頁)。

40) Luscombe p. 158; Monfrin p. 117; 畠中訳 99 頁 (横山訳 137 頁)。さらに直後エロイーズは「物の自然的秩序にさえ反して *contra ipsum ordinem naturalem rerum*」とまで言っている。

例えば *Rationes dictandi* には夫婦・恋人間の文例、あるいは修道士から修道女にあてた文例は載っていないが、教師から教え子にというのはあり、そしてその例においては教師が先に書かれている<sup>41)</sup>。

#### 4.2 5つの書翰の部分 *partes epistolae*

ドロロンケが第2書簡の構成を *Ars dictaminis* に沿って分析している<sup>42)</sup>。ドロロンケの分析に情報を付け加え、上記の「書翰の部分」を当てはめる形で構成を示せば次の表のようになる。

Monfrin 版行	畠中訳頁、行	内容	書翰の部分
1-3	73 : 3-4	呼びかけ	冒頭挨拶 <i>salutatio</i>
4-67	73 : 5-75 : 13	「友人への手紙」について	導入 <i>benevolentiae captatio</i>
68-126	75 : 14-78 : 17	アベラールの義務	叙述 <i>narratio</i>
127-216	79 : 1-83 : 7	エロイーズの精神状態記述	
217-74	83 : 8-86 : 7	エロイーズによる冒涇と叱責	懇願 <i>petitio</i>
274-75	86 : 7-8	結びの挨拶	結語 <i>conclusio</i>

つまり「導入」においては、友人を励ますために書かれたという『災厄の記』について触れ、適切で効果的であったことでしょうかとばかりに称賛を寄せて導入にしている。それから「叙述」としてアベラールにはエロイーズを含むパラクレの修道女たちに対する義務があると論じ進め、さらにエロイーズがどのように苦しみを受けていて、その苦しみを癒せるのはアベラールだけなのだと言われる。そしてエロイーズの修道生活は神への愛ゆえではなくアベラールの愛ゆえであったのだからもっと頻繁に訪ねてくれるよう「懇願」をする。*Ars dictaminis* が模範とする構成に見事に合致している<sup>43)</sup>。

41) *Rationes dictandi*, p. 16; *The Principle*, p. 14.

42) Dronke, *Women Writers...*, p. 112.

43) ドロロンケは第4書翰も同様に構成を分析しているが、同様の分析を示すことになるので本稿では割愛したい。Cf. Dronke, *Women Writers...*, p. 121.

ところが、ドロロンケは言及していないアベラールの方はどうなのか。確かに『災厄の記』は *Ars dictaminis* を用いているとは言えないだろう。しかし、第3書翰となるとそうとも言えない。上記と同様の仕方では表にまとめれば、

Luscombe 版節	畠中訳頁, 行	内容	書翰の部分
§ 1	88 : 4-5	呼びかけ	冒頭挨拶
§ 1-3	88 : 6-89 : 6	謝罪と称賛	導入
§ 4-12	89 : 7-97 : 11	女性の祈りは効果的	叙述
§ 13	97 : 12-14	わたしのために祈って	懇願
§ 13	97 : 15-16	結びの挨拶	結語

つまり「導入」において、不義理を謝罪すると同時にエロイーズの模範的な修道態度を称賛する。それから「叙述」として信者の祈りにおいて敬虔な女性たちの祈りがより効果的であるということが長々と説明される。そして不幸の渦中にある自分のために祈って欲しいというアベラールの「懇願」がなされる。先に「冒頭挨拶」のところでもそうだったように、エロイーズだけでなくアベラールもまたエロイーズ宛の書翰を書くにあたって *Ars dictaminis* を用いていたと見るのが妥当であろう<sup>44)</sup>。

## 5. まとめ、結語に代えて

本稿においてまず、アベラールの自由学芸に対する関わり、あるいは彼の同時代人による彼と自由学芸についての受け取り方を見たが、そこにおいてわれわれは自由学芸に通例含められるいくつかの学問が学ばれるべき科目として認識されていることを窺い知ることになった。しかし同時に、アベラールによってそれらが基礎的な学問として学ばれ、血となり肉となつて議論や思索の中で用いられているとまでは確認できなかった。一流の学者として当然学んでおきたい、精通していると人に思われたい学問ではあっても、言わば「履修が必須の基礎科目」のようなものではなかったと

44) 大会当日は、さらに“*cursus*”の利用についても取り上げた。*cursus*とは *Ars dictaminis* と同じ時と場所で誕生した韻文的散文の文体であり、*Ars dictaminis* とともに広まったものである。だが本稿ですれを行うだけの紙面は残されていない。この点に関しては別の機会に論じたい。

表現できよう。

つぎに、エロイーズとアベラールの書翰における *Ars dictaminis* の使用を確認した。つまり彼らが用いたのは十数年前にイタリアで成立したばかりの様式であり、古代の修辞法ではなかった。もちろん、二人は手紙をやりとりしたのだから、書翰作文術に従うのは当然だろうと反論されるかもしれない。しかし、当時は手紙が私的な感情を伝達するためのものではなかったことを考えると、例えば、修道院の成立譚を後の修道女たちに伝えるために書かれ、その形式として書翰を選択したと考えるのが妥当であろうから、この選択自体にこの時代の修辞学的実践が如実に現れていると考えることができるだろう。アウグスティヌスが神への告白という形式を選択して『告白』を記し、ポエティウスが韻散文混交の対話形式を選択して『哲学の慰め』を記したように、アベラールとエロイーズもまた *Ars dictaminis* に従った書翰形式を選択したわけである。

キケロー、クインティリアヌス流の古代修辞学は「崇拜されてはいても、あまり実践はされていなかった」という見方を本稿冒頭に書いたが、アベラールとエロイーズに関する限りこの見方は当たっていることを本稿後半において見た。そしておそらくは12世紀前半の西欧における一部の例外を除くほとんどの知識人にとっても事情は同様なのではないだろうか。さらに本稿前半の考察を視野にいれば、この見方は古代修辞学だけでなく自由学芸全体にあてはまるのではないだろうか（アベラールにおいては論理学と文法学をのぞくことになるが）。そのような見通しに対して本稿で取り扱うことができた事例はごく限られていた。さまざまな領域から多くの方が検討をしてくださることを願って、シンポジウム提題の報告を終えたい。

## 謝辞

本研究は科研費（21520039）の助成を受けたものである。ここに記して謝意を表す。